金融政策の遅れを考慮した連続時間ニューケインジアンモデル

都築栄司

要旨

本稿では，連続時間ニューケインジアンモデルを用いて，バックワードルッキングな利子率ルールが均衡の局所的決定性に与える影響について考察する．特に，インフレ率に対するウェイト関数がベキ分布型である場合と分散がゼロである場合の２つの特殊ケースを考える．後者は，形式的には，中央銀行による政策の実施に一定の遅れ（ラグ）が存在する場合と考えられる．ウェイト関数がベキ分布型である場合，政策がアクティブならば均衡は局所的に決定，パッシブならば不決定となる．一方，ラグが存在する場合には，ラグがそれほど大きくなければ均衡は局所的に決定となるが，ラグがある程度大きいと均衡は存在しない．政策がパッシブならば，均衡は不決定となる．